

早出し茶栽培の現地実証

朝倉政江・広瀬真一・姫野秀三・佐知志保¹⁾（大分県農業技術センター・¹⁾大分農業改良普及センター）

Masae ASAKURA, Shin-ichi HIROSE, Hidezo HIMENO and Shiho SACHI : Result of Field Test on Tea Cultivation for Early Harvest in Oita

大分県南部の無霜地帯鶴見町で、ミカンの荒廃園を利用し、早出し茶を目的とした1haの新植茶園が1989年に造成された。しかし、ミカン園跡地を利用した茶の栽培はこれまで大分県では事例がない。そこで、現地に試験圃場を設置し、本地域に適する早生品種の選定と早出し茶の有利性について検討した。

1. 材料及び方法

1989年に‘あさつゆ’‘さやまかおり’‘やぶきた’‘ゆたかみどり’‘くりたわせ’‘おおいわせ’‘めいりょく’の7品種を現地に定植した。栽植様式は畝間150cm、株間25cmの一条植えで、1区15mとした。施肥、防除等は当所の慣行栽培に準じた。

調査は萌芽期、摘採期、収量、秋季の樹高及び株張りについて行った。

2. 結果及び考察

萌芽期、一、二番茶の摘採期、収量及び秋季の生育状況を調査した結果、‘ゆたかみどり’が生育、収量ともに優れ、本地域に最も適した品種であることが判明した。

‘ゆたかみどり’の1991～1994年の平均摘採日は4月19±4日で、中生種の‘やぶきた’より5日早かった。

‘ゆたかみどり’の導入により、これまでの県内の最も早い茶産地（4月25日）より6日早く摘採できることが判明した。

収量については一、二番茶合計で‘ゆたかみどり’が最も多収であった（第1表）。秋季の生育でも樹高、株張りともに優れた（第2表）。

摘採の早進化に伴う経営の有利性について、県内の一般生葉取引価格と比較した。収量が同一（一番茶500kg/10a、二番茶400kg/10aとした）と仮定した場合、一、二番茶合計で161%の粗収益となった（第3表）。現時点

での一、二番茶合計収量は547kg/10aでここに示した算定収量には満たないが、今後2年間に樹体量が増加し、摘採面積の拡大も予想されるので、ほぼ算定基準数値に達すると考えられる。従って、鶴見町の早出し茶は県内の他産地に比べ、有利性が高いと考えられる。

一方、当地は沿岸部でミカン荒廃園であるため、礫質土壌に加え、さらに土壌pHが6.0～7.5と茶樹の好適範囲よりも高く、1) 場内圃場に比べて生育がやや緩慢で収量が少ない、2) 赤葉枯病が7月と2月に多発する、3) 台風時に潮風害が発生するなどの問題点が生じた。従って、今後茶を沿岸部に普及する際には、pHの矯正や保水性の向上のために土壌の理化学的の改善が必要で、さらに、潮風による塩害の被害軽減と干ばつ対策としてスプリンクラーの設置が前提条件であると考えられる。

以上の結果から、鶴見町での早出し茶栽培には‘ゆたかみどり’が最も適した品種であり、本品種の導入により、県内で最も早い茶産地よりもさらに6日早く摘採でき、経営的にも有利であることが判明した。残された問題点もいくつかあり、これらを克服し、高品質、多収栽培を確立することが今後の課題である。

第2表 秋季の生育状況（1993年）

品 種	樹高 (cm)	株張り (cm)	5段階 ^{a)}
			生育判定
あさつゆ	85.0	109.3	3
さやまかおり	84.0	109.7	3
やぶきた	92.3	105.7	3
ゆたかみどり	95.3	138.7	5
くりたわせ	82.0	108.3	3
おおいわせ	74.3	113.3	2
めいりょく	85.0	119.7	3

注) a) 生育の良否は5→1（良→不良）

第1表 一、二番茶合計収量の年次変化

品 種	収 量(kg/10a)		
	1992年	1993年	1994年
あさつゆ	284	584	504
さやまかおり	289	525	299
やぶきた	192	216	336
ゆたかみどり	403	648	547
くりたわせ	254	501	446
おおいわせ	223	267	277
めいりょく	167	347	462

第3表 生葉取引価格及び粗収益（同一収量と仮定した場合）の比較

産 地	一番茶(円)		二番茶(円)		合計 (円)
	単価 (500kg/10a)	単価 (400kg/10a)	単価 (400kg/10a)	単価 (400kg/10a)	
県内平均	500	250,000	150	60,000	310,000
鶴見町	800	400,000	250	100,000	500,000
比(%)	160	—	167	—	161